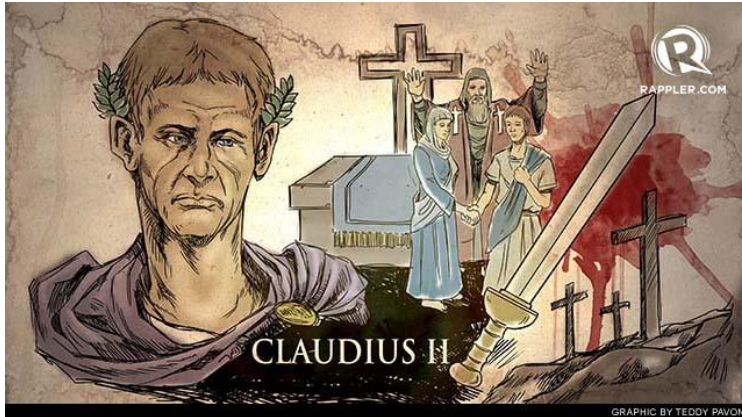


今月のみことば 2016年2月

「結婚がすべての人に尊ばれるようにしなさい。寝床を汚してはいけません。
なぜなら、神は不品行な者と姦淫を行う者とをさばかれるからです。」

(ヘブル人への手紙13章4節)

聖バレンタインとチョコレート



カード10億枚、チョコレート3,500万箱、バラ2億2千万本、宝石類40億ドル(4,680億円)、一人あたり15,000円、総額200億ドル(2兆3,400億円)…これはアメリカで、毎年バレンタイン・デーのために使われるプレゼントとその出費である。当の聖バレンタインも驚くに違いない。

歴史的に真偽のほどは確かでない

ものの、戦争好きなローマ皇帝クラウディウスII世は、結婚した兵士は士気が下がるという理由で、兵士の婚姻を禁止したらしい。司祭だったヴァレンティヌス(バレンタイン)は秘密に兵士を結婚させたが、捕らえられ、処刑されたとされるという。さしずめ、バレンタインは愛の使徒という趣きだ。

今も、アメリカでは毎年600万組の男女が、2月14日を婚約の日としているそうだ。日本はもとより、最近ではイスラム教を国教とするサウジアラビアでもバレンタイン・デーがはやり、この「異教的な習慣」をやめさせようと、最高刑である死刑をちらつかせながら取り締まっているが、なかなか効果があがらないとか。

ところで、今では当たり前の一夫一婦制だが、その原点は聖書にあることをご存知だろうか。イスラム教は4人まで妻を持つことを認めている(マホメットには11人の妻がいたが)。儒教も仏教も性道德に関しては極めてゆるかったことはよく知られている。日本においても、明治天皇や元勳までもが妻妾をかかえていたのは周知の事実であった。日本で一夫一婦制が確立するのは何と戦後である。

結婚を尊ぶ、というのは「それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである」(創世記2:24)という、人を男女に造られた神の定めを受け入れることでもある。「不品行」(すなわち未婚者が性的関係をもつこと)や「姦淫」(夫や妻以外の異性と性的関係を結ぶこと)がどれほどの苦悩と不幸の原因となってきたかを考えると、結婚という関係の素晴らしさとそこにこめられた創造者の英知を思わずにはいられない。

バレンタイン・チョコレートはともかく、聖書の示す結婚のあり方がどれほど幸いなものかを改めて覚えないものである。